

---

crescent moon

ゆう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

crescent moon

### 【ZPDF】

Z3380P

### 【作者名】

ゆう

### 【あらすじ】

初々しい高校生たちのお話。

見た目で損をしてしまう佐藤孝洋くんは、感情表現が苦手な有吉千紗ちゃんと、もっとラブラブしたいなあ・・・と思つてゐるのですが・・・。

明朗快活な吉見月子ちゃんは、おねい系先輩の千種雪生と微妙な関係。

これが有名な友達以上恋人未満つてヤツ?

などなどなどなど・・・

まだまだ未熟者・・・まだまだ満月のようにはなりきれない高校生たちの小さな物語集。

## 恋心（前書き）

人見知りで重たげな臉と短髪のせい？で損をする佐藤孝洋くん。でもじつは彼はすごく心根の優しい健全な高校生。

そんな孝洋くんの彼女はかわいい千紗ちゃん。でも千紗ちゃんは、中学生の頃は教室外登校することもしばしばあった、感情表現が苦手で繊細な女の子。

そんな不器用な二人のお話。

## 恋心

きつかけは何だったかなんて、ほとんど覚えてないけど、多分、顔が好みだったことが始まりのはず。

「孝洋、ここ分かんない」

千紗が数学のプリントをシャーペンでコシコシしながら、聞いてきた。

学校を休みがちな千紗からすれば、毎日登校しているだけでもすこじい進歩で、少なからずそれは俺のおかげだ、とクラスメイトの吉見に言われたことがある。

「うん？」

向かい合わせで座る千紗の手元を覗く。

白くて細い指。

多分女の指にしては節が目立つ方だと思つ。

白い枯れ枝のような手だ。

でも、俺はそんな千紗の手を握るのが好きだった。

自己満だけど……

その手は俺がないと頼りなく折れてしまいそうだし、風が吹けば飛んでいいてしまいそなのだ。

それはきっと千紗自身のイメージでもあって……。

だから、俺が手を繋いでいれば千紗を守れる。そばに居られれば、きっと千紗を笑顔にできる。

そんな錯覚を覚える。

「これは、×に代入するだけ」

千紗は俺に言われた通り代入すると、その枯れ枝のような手で握ったシャーペンを必死に動かす。

そして

「できたつ。合つてる?」

俺にプリントを渡す千紗は、うつすら頬が紅潮し、達成感にも似た笑顔を浮かべていた。

正直、そこまで難しい問題じゃないのだが、数学が大嫌いで、毎回サボろうとする千紗には大仕事だったはずだ。

…。  
…。  
…。  
…。  
…。

俺も頬と目尻が緩むのを抑えられない。

「うん、合ってる」

そつ言つて、赤ペンで大きな丸印を一つ。

「やつた」

千紗は極上の笑顔を見せた。

うん…。

こんな千紗の笑顔、なかなかお目にかかるない。

…ホントは…

今この瞬間に、千紗を抱きしめたいし、キスしたいのだが…。

ぐつといじらせる。

千紗は分かつてない。

俺がどれだけ我慢してるかを。

俺がどれだけ千紗を独占したいかを。

俺がどれだけ、千紗のことを好きかを。

俺がどれだけ千紗を大事にしたいと思っているかを。

そして、俺が毎日やれやらのジレンマと戦っているのか。

「ありがと、孝洋。

あたし、図書室によつて帰るね

「一緒に帰りつ、待つてね」

「でも…時間かかるよ

「いいよ」

時間なんていい。  
いくらでも待つさ。

今でも千紗が俺にハマってくれるのを、ずっと待ってる最中なのだ

から...。

## 恋心

立ち上がった千紗に、俺はもう一度言った。

「千紗を、待つとくよ」

そつと少し首を擡げる千紗は、何か考えるようすに宙に視線を漂わせると、すっと俺の横へ来た。

「ね、何かお礼したい」

「…だれに？…なんの？」

突然の言葉に俺は聞き返す。

すると千紗は俺の座る椅子の隣の席に座った。

「孝洋に。数学教えてもらつたお礼」

恥ずかしそうに上目遣いで言つた千紗。

コイツは俺の理性を試しているのだろうか？

人気のない教室。

遠くから吹奏楽部の楽器の練習と、野球部のかけ声が聞こえてくる。

「いいよ、礼なんて」

千紗に変なことをしないよう、「机上のシャーペンを回して気を紛らわす。

「でも……」

「いいから、早く本借りて来いよ。暗くなる」

俺の言葉に、千紗はまだ何か言いたげだったが、しぶしぶといった様子で教室を出て行つた。

「はああ……」

大きなため息と共に俺は机に突つ伏した。

何の修行だ！？

なぜ彼女といて、こんなに気苦労をしなきゃなんないんだ！？

そして…なぜ千紗は気づかないんだあ！？

とにかく、俺も健全な高校生だから、いろいろと興味津々な年<sup>いと</sup>なわけだ。

で、彼女がいて、そいつのことがとにかく好きで、千紗の性格上（  
基本的に千紗は集団行動が苦手だから、教室を抜け出すんだが）、  
一人きりになることが多い。

今だつてそうだ。

そして付き合い始めてもうすぐ半年。

手を握るだけでは物足りない。

軽いキスだけじゃあ、気持ちがあさまらない。

ヤラシイ気持ちで千紗を見てくるわけではないのだが……。

千紗はぱいぱいとこるのせ、ひる。

「まあ……」

もつて一度ため息をつき、俺は田を開じた。

## 恋心

「一。」

体がピクっとなり目を開ける。

あたりを見回すとやつ もより暗くなつており、自分が寝ていたのだと気づく。

「おはよ」

後ろから声がしたので振り返ると、千紗が後ろの席で本を読んでいた。

「千紗…起こせよ」

「ん…なんか…」いつのものになつて…」

非難がましく言つ俺に、千紗は本に栄を挟みながら訳の分からぬことをいった。

「帰る?..」

バックに本をしまいながら、千紗は言つ。

「ん」

俺は机の脇にかけていたカバンを持ち、時計に目をやつた。

7時前。

「30分くらい寝てたみたいよ

千紗もカバンを持って立ち上がった。

俺は無意識に、千紗の頭に手を置き、髪を梳いた。

真っ直ぐでサラサラの髪だ。

「な……なに?」

千紗が警戒したように身を退いて聞く。

「や、サラサラだな～って

俺の短い髪とは大違い。

「彼氏相手に、そんな警戒すんなよ」

苦笑して言うと、千紗はバツが悪そうな…そして困ったような複雑な顔をした。

千紗を困らせたいわけじゃないんだよ…。

「何もしないよ」

自分で聞こ聞かせるように言つて、俺は千紗に顔を向けた。  
そして歩き出す。

「電気、消すぞ」「うそ

後ろからついてきた千紗の声を聞き、俺は教室の電気を消した。

……

「……なんだよ……」

千紗がおもむろに俺の背に抱きついて來た。

「…た…。あのっ…」

千紗のか細い声。

少し頭を動かして振り返るとすぐそこへ、さつき俺が指を通した髪。

さつきまで遠かつた千紗が、すぐ側 鼻先にいた。

## 恋心

ギリギリだった俺の理性は… 本能に負けた。

体を捩つて正面から千紗を抱きしめる。

薄いブラウス越しに、千紗の細い体から体温を感じる。

鼻先にある髪からはシャンプーの香りがする。

細い千紗の体は、俺の腕にすっぽり埋まり、少し首を擡げれば、千紗の細い肩に、俺の顔は沈む。

でも…この体制も、本能に負けた俺には自制心をかけられない思いに拍車をかけた。

「た…たかひる…」

身を固くする千紗に、俺は今までの恨みだとばかりに意地悪したくなつた。

「俺の気持ち…分かつてんの?」

「えつ…」

上田遣いに千紗を見上げると、戸惑い真っ赤な千紗と至近距離で田  
が合つた。

「千紗が俺に抱きつくから悪いんだぞ」

そうつ言いて、俺は首筋にかかる千紗の髪を一つに纏めるように掬つ  
た。

露わになる細い首に、俺はキスした。

「た…たかひろつ…」

戸惑いと驚きを隠せない千紗の声。

俺の胸に手を這ひて俺を離さないとするが…。

逆効果。

髪から手をはなし、千紗の細い手首を掴み、引き寄せた。  
そしてその手は離して腰に腕を回して引き寄せた。

お前が悪い

と言ったためか、意外と千紗は抵抗しなかった。

きつめに首筋をすい、唇を離す。

そして引き寄せた腰はそのままに千紗を見つめた。

「じばりへ迎えないの、つけたかい」

「！？」

真っ赤な千紗が、俺の脣のあとで手を離れる。

痕はついたはずだが、きちんと見えないとこにつけた。しかし、それは千紗には言わない。

俺はそのまま、ゆっくりと千紗へと顔を近づける。瞼を揺らしながら目を開じた千紗はゆっくりと顔を上げる。

俺はそれを全て見ながら口づける。

軽いのじゃなにヤツ。

「んつ……

頑なにがつひりと歯を食こしじばる千紗。

……なんと頑固な……。

今まで俺は我慢してきたのだし、やつれは千紗から抱きついてきたのだ。

これくらいご許してくれてもいいはず……。

「…千紗…口、開いて?」

自分が口を開いて、やつと理性的になれた俺は真っ赤な千紗に優しく言ひつけ。

千紗は俯いたまま  
「だつて…」  
と言つた。

「…あたし…は…初めてだから…。分かんないもん」

恥じらい、唇を尖らせる千紗が可愛くて仕方ない。

わざとか？

また俺を試しているのだろうか？

もじもじする千紗の頬を両手で掴み、顔を上げさせる。

「んっ…」

「…安心しin。俺も初めてだ」

何の自慢にもならないが、気づくと俺は自信満々にそつ千紗に宣言していた。

今度はポカンとした千紗が、呆然と俺を見上げていた。

ちよつと…間抜けな宣言だった…。

それを証明するように千紗は笑った。

「な……なんだよ、悪いか?」

バツが悪くなり、俺はそう呟いた。

「ううん。全然」

微笑んだ千紗が、ゆっくりとした口調でそう言った。

「せっかく、月子と会ったの。月子に、孝洋に何かお返しがしたいって言つたら、『キスでもしてやれば』って言われたの。」

千紗がまた頬を染めて、千紗の信頼する友だちである吉見との話をする。

千紗…吉見に俺のこと話すんだ。

そつ思ひど、俺さちやんと千紗に彼氏つて思われてんだって…何だか胸がキュッと締め付けられるような思いがした。

「…初めてだから…あの……あたし…」

「いいから…目、閉じて」

俺は千紗を黙らせて、再び千紗の唇と自分の唇を重ねた。

何度も啄むよひにして、少し唇を離す。

うつすらと目を開けると、真っ赤な千紗がいる。

「少し… 口開けて…」

触れそうで触れないくらいに離れて言つ。

すると千紗は少し目を開けて俺と視線を絡めた。

クイッとまた顔をあげて目を開じると、おずおずと薄く口を開く。

正直俺は緊張して、手なんか汗でぐつしょりだつた。

緊張で心臓は飛び出しそうなくらい脈打ち、頭がクラクラする。

「クッと睡を飲む。

こんな緊張は千紗に告つた時以来……？  
もしくは合格発表以来だ。

俺もこの女のよつて震える唇で千紗のそれと重なる。

深く。

「んっ……ふっ……」

角度を変えて深く口づけるたびに漏れる、千紗の苦しげな声。

俺の理性は、またもや吹っ飛びそうだった。

本当に頭が痺れた感じがするのだ。

うまく息ができないから、だけではないはずだ。

俺は、まるで千紗を食べるよつて千紗の唇を貪り、舌を吸いつ。

どんなに腰を重ねても、まだ足りないと想つ。

俺は、ぐるっと向きを変えて、千紗を壁に追い込んだ。

「え？ … ん？ …」

壁に押し付け逃げ場のない千紗と、一番深く口づかる。

それは永遠のようにも感じられた。

## 恋心

壁に千紗を追いやつ、その千紗を挟むように自分の肘を壁につく。

暗くなり始めた教室には、校庭のライトが差し込み、呼吸を荒くする俺たちを照らしている。

薄ぐ田を開けると、眉根を寄せ、苦しげに頬を染める千紗の表情が眼前に迫る。

こんな千紗の顔、初めて見た……。

そして、その表情はまるで俺の気持ちを燐るようだった。

「千紗……」

唇を離し、千紗を呼ぶ。

「ん……？」

肩を上下させる千紗が俺を見上げる。

ああ……。

ライトのせいだと思いたい。

千紗の真つ白な白眼は濡れてまるで真珠のように綺麗だった。

きっと今日、千紗との距離は縮まった。

体も心も…。

満足しなければ、と自分に言い聞かせる。  
これ以上はわがままだ。

なのに、全然足りないと思つし……その先をしたくなつてきた。

もちろん俺はまだ清らかな少年なのだが…。

「ち…千紗…」

「うわーえつ…ちょ、ちょっとーな…な、なにー?」

俺はずいと千紗に迫り、その脚の間に自分の膝をねじ込んだ。  
俺の方が背も高いわけだから、俺の膝は千紗の股を割いたのだが…。

「孝洋の嘘つきー何もしないって言つたらじやん

蒼白の千紗が、まるで汚れた雑巾を見るような目で俺に言った。

た…確かに言つたけど…

「ねまつ…。今更んなこと言いつか、フツカ」

「ディープキスまでさせとこじ、言いつけてだらつかー…？  
それには無理強いでもなく、双方の同意のもと行われた正当な  
行為のはず…！」

なのこ…

「だつてやうじゅん…」

ムキになる千紗に、勢いで俺も言ひ。

「じやあ嘘ついでこ、千紗は俺と…。」

最後までいってくれるんだよな?  
いつかは。

今日だと嬉しいけど…

「千紗、俺こいつかは千紗と……その……」

これ口元にして細ひどい言葉で呟く。

「のー嘔を今口にしてしまった、千紗との距離は離れてしまつたのではないかと、不安がじみ上りてきた。」

「やのあ……」  
「……なに?」

言葉に詰まつた孝洋に、千紗は首を傾げた。

孝洋は不安な気持ちを隠すまいと、千紗から体を離し、拳をキュッと握る。

「や、急にあんなことって、……嫌……だった?」

この質問の答えにも、かなり不安はあるのだが、とつあえず、今の千紗の気持ちが孝洋は聞きたかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3380p/>

---

crescent moon

2010年12月20日19時15分発行